

# 夏目漱石とクラシック音楽

(第15回)

## 歴史の証人のティンパニ

音楽学者・元東京藝術大学特任教授

瀧井 敬子

明治日本にオーケストラがどのようにして根付いていったのか、歴史の草創期を見ていた一對のティンパニが現存する。お雇い外国人教師のaugust・ユンケル（1868－1944）が、明治37年に東京音楽学校に寄贈したものである。銅製の胴体には、「PRESENTED TO TOKYO ACADEMY OF MUSIC BY PROF. A. JUNKER 1904」という手彫りの文字が見える。一對の両方ともに、同じ内容の欧文が刻まれている。

このティンパニは、七つのチューニングボルトが上部の周囲に付けられていて、そのボルトを手で締めることによって音程を調節する、いわゆる古典的な手締め式である。ちなみに、今日のオーケストラで使用されているティンパニは、足ペダルの操作によって音程を変更する。

ユンケルが寄贈したこの手締めのティンパニは、かつてゴミとして捨てられる運命にあった。それを救ったのが、当時NHK交響楽団の首席ティンパニ奏者で、東京藝術大学で打楽器を教<sup>あるがまこと</sup>えておられた有賀誠門先生である。学生時代に使ったことがある古い手締めのティンパニはどうなったのだろうか？とふと思い出し、無性に気になって、藝大の楽器係に駆け込んだのだという。その楽器は廃棄処分となって、胴体を逆さにして、埃をかぶって、静かにおかれていた。

有賀先生はエネルギーに未来に敢然と立ち向かうタイプで、これまで先端的な現代音楽の佳

作をいくつも初演してこられた。しかし、その一方で先人の足跡を謙虚に見つめ、歴史に敬意を払うことを信念<sup>おれ</sup>にしておられる。「引き受け手がないなら、俺が引き取る！」と楽器係の事務官を説得された。そのようにして救い出されたティンパニは、愛弟子である竹内将也氏（仙台フィルハーモニー管弦楽団首席ティンパニ奏者）の空調の効いたスタジオに、現在、保管されている。

さて、この楽器は、一時期、拙宅に預からせていただいたことがある。せっかくの折なので、私は二人の工芸家、鍛金の相武常雄氏と漆藝の三田村有純氏をお招きした。そして、有賀誠門先生に無理にお願いして、鉄製の丸い大きな枠、つまりリムを外して、皮が張ってあった胴体の内部を見せてもらった。どうしても見たかったからである。外気に直接触れることがなかった内部は、銅が自然に変化したときに見せる落ち着いた褐色<sup>ろり</sup>になっていた。三田村有純氏は、リムの裏側に残る瑠璃色に目を止めて説明して下さった。鉄製のものは何かの塗料を塗ってさび止めをするが、漆がないヨーロッパでは、顔料をアルコールで溶いた塗料が開発された。このティンパニでは、貴重な顔料のラピスラズリが使われたのではないかと思われる、と。

夏目漱石は、ユンケルが寄贈したこのティンパニを奏樂堂で聴いている。